■きょうの話題・あすの話題

国立高知医科大学

開校51年

岡豊町小蓮に設置？

県、始めて地元で説明会

国立高知医科大学が、昨年十二月二十九日の閣議で四十九年度の創設準備校に決まり、五十一年開校をめざして準備をすすめる運びとなりました。

このため、県は三月五日、小蓮部落公民館に地元代表ら約二十人を集め、同医大の岡豊町小蓮設置について説明会を開きました。

医大の誘致運動は、昭和四十三年に県議会が意見書を採択。高知大学に医学部を設置することを陳情したあと、再び四十六年七月採択。県、県内自治体、県医師会、大学などが中心に「高知大学医学部設置期成会」をつくり国に陳情。その後、教養課程から教育する専門の医科大の誘致に切り替えて本腰を入れていました。

当初、高知市池の国立高知療養所周辺を予定地として誘致していましたが、療養所の土地払下げ計画の縮少などの問題があり、岡豊町小蓮に県住宅供給公社が所有する二十二万平方㍍に切り替えられたものです。

当日は県から白石文書学事課長、石原期成会参事らが出席。杉本市長ら市幹部、地元市議会議員、岡豊町の各部落長らが説明をうけました。

まず、杉本市長が「具体的なことを地元に知ってもらうことが大切。静かな田園の岡豊が変ることになり、生活にも影響をおよぼすことになる。一人の犠牲者も出してはいけない。医大が設置されることによって、岡豊がどのように変るかを考えてほしい。市のためになる発言なら国、県にも痛いことをいっていきたい。」

続いて白石課長が、いままでの経過とこれからの協力を呼びかけました。それによりますと――。

国は各県に一校の医大を設置する方針で、現在、全国で八県が残っている。昨年十二月二十九日、高知県など五校が創設準備校に決まった。このため四十九年度の前半で用地を確保、後半に土地造成をすまし、五十年度に建設、学生募集。五十一年四月から開校する運びを考えている。

これにより、過疎地区の医師不足を解消、最新鋭の設備で医学の調査研究をすすめ、職業病、風土病など特殊な疾患などに取り組み、県民の健康を守りたい。

大学は六年制、一学年百人の定員で総定員六百人。三年までは一般教養を教え、その後専門課程へ。関連教育病院は県立中央病院を予定、卒業前、後の実地研修に。附属病院には四百～六百床、百五十人の医師、医局員、技師、二百八十人の看護婦、百人の事務職員、その他四百五十人の規模。五百戸の公務員宿舎が必要だ。

学生の下宿、生鮮野菜の供給、地域の発展など地元へのメリットもあろう。建物や下水処理など内側は国、外側の整備は県が行うことになる。などの説明があり「まず、地元の了解を得るとともに県とのパイプを通すため、医大設置をすすめる組織をつくってほしい。そして、受け入れ体制、整備条件などについて話し合いたい。」と地元に協力を呼びかけました。

地元代表らは「県営住宅が来るより理想的だ。公害のある工場でもないので、基本的には反対はない。土地の買い足しについては農業者におよぼす影響も強いだろう。一・四～五㍍かさ上げすれば国分川下流の南岸住民は黙っていない。国分川と関連河川の改修が、まず先行しなければならん。」と、湧水地帯を埋め立てることによる国分川などの河川を心配。

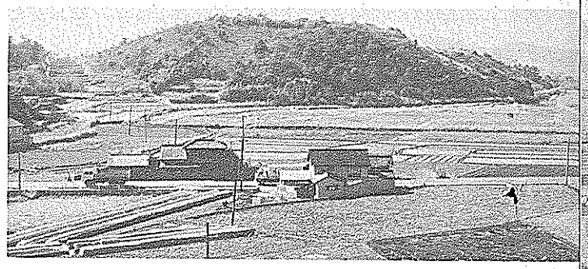
県も「医大設置に関連した国分川改修の具体案は今のところないが土木では考えている。造成にかかるとき水路、農道の計画も話し合いたい。建物、その他附属物の設計、配置などで用地の形状を修正することもあろう。交換、買い足しはそのときで、現在、具体的にはわかっていない。」

小蓮が内定して始めての説明会で、県のあいさつ程度にとどまりいまだ具体策のない感じ。「地元は具体的なことを知りたい。これ以上田を取られると農業を続けられない。」との意見もありましたが、「国、県とのパイプ役として地元に窓口となる組織をつくってほしい。」具体策はこれから話し合っていきたいということになりました。

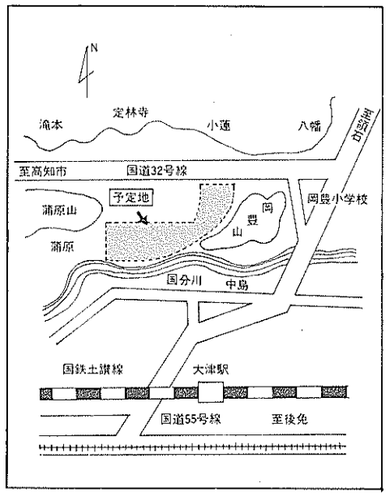
最後に杉本市長が「相方の熱意をどこでかみ合わせるかだ。周辺は都市化されようから、町づくりや隣り組みづくりも必要だ。大きな構想なので、大所高所から考えてほしい。」と結びました。

今度の説明会は、昨年末、高知県への設置が本決まりとなり、候補地に小蓮が内定したが、地元との話し合いは始めてであり、あいさつと医大誘致の経過報告にとどまり、今後、地元の組織や市、市議会などとの具体的な協議に入ろうとしています。

市議会にも特別委員会を設けて調査、研究していますが、国分川など関連河川の改修、農用地の保護、市医師会の態度など問題も含んでいるだけに、医大設置の意義や誘致競争の現状、岡豊地区を含めた市の発展なども慎重に考えあわせて結論をださなければならないといえましょう。



候補地になっている小蓮地区。右の山は蒲原山、左は岡豊山（岡豊病院屋上から南を望む）



国立高知医科大学の予定地

わが町を生きる

ふるさとの味

寒い海岸でチリメンジャコの入札が行なわれる。ママゴ石に値段を書いて、独特の入札である。

昭和三十八年の漁業従事世帯、二百二十五世帯。十年後の四十八年は百十九世帯に減っている。

三月八日、浜改田で「美しい自然の中でふるさとの味を」というわけで「観光地引き」が開かれた。時代の流れといえばそれまでだ。

男たちは今、かつての活況をひきもどそうとするかのように、思いのたけをこめて地引きを引くにちがいない。